

野生動物との共生をめざして③



春の知床岬空撮写真。屏風のように海に突き出た知床半島

知床におけるヒグマとの共生
～実践とその課題～

北海道の豊かな自然環境を構成するさまざまな生物たち、私たち人間の営みが拡大していくにつれて、狭められ分断されていった生態系。こうしたなかで今、さまざまな公共施設で、地球環境や身の回りの自然とのやさしい関係を再構築するための取り組みが始まっています。

このシリーズでは、野生動物に配慮した公共施設整備のあり方を探ります。

道路沿いで頻発する問題

知床を訪れる観光客と野生動物とのあつれぎの多くは、道路沿いや遊歩道沿いで発生しています。ほとんどの観光客が目的地まで車で移動し、到着後は遊歩道を散策するという利用の現状からすれば当然といえますが、単にそれだけ

ではなさそうです。観光客の野生動物に対する正しい知識の欠如が問題を深刻化しています。



悠然と歩くヒグマ。知床は世界的に見ても有数の高密度生息地だ

海と山とが一体となった景色、満月の夜に青く照らし出された知床連山、青い空を悠々と舞うオジロワシ、短い夏を惜しむかのように咲き乱れる高山植物、青い海を泳ぐイシイルカの群れ、岩礁でのんびりとくつろぐゴマフアザラシ、そして原生林を悠然と歩くヒグマ...

また、撮影を目的とした野生動物への接近も跡を絶ちません。一部のカメラマンはより迫力のある映像を求め、無謀にもヒグマに近づいていきます。場合によっては、その距離はわずか10mほどです！ヒグマは人を積極的に襲う動物ではありませんが、突発的な接触事故がいつ起きてもおかしくない状況があります。

備えのない観光客とヒグマが至近距離ではちあわせするという事態が毎年発生しています。

動管理を徹底できない現状では、人とヒグマとの間に一定の距離を維持することが事故防止上どうしても必要です。

知床の自然を将来に残すためには...

さらに、知床では「クマ渋滞」と呼ばれる、一風変わった交通渋滞が発生します。道路付近に現れたクマを見ようと次々と車が止まり、その数は10台、20台、40台と膨れ上がっていきま

今春、知床五湖では、環境省により設置された、新しい木道の利用が始まりました。この木道は全長約247m、地上高2mの高架式の木道で、木道の両脇に電気柵を併設し、ネズミ返し

ヒグマと人間、双方の安全が期待される高架式木道や電気柵、シャトルバスシステムですが、これが万全の策ではありません。結局は、人間の行動が改善されなければ根本的な解決には至らないのです。

これらの問題に対し、日常的なパトロールや、観光客、地元住民、自然ガイドなどに対するレクチャー、ヒグマの追い払いなどのソフト面と、看板、電気柵、高架木道の設置といったハード面のさまざまな対策が行われており、そのほとんどを私たち知床財団の専門家チームが担っています。

今年、知床五湖では、環境省により設置された、新しい木道の利用が始まりました。この木道は全長約247m、地上高2mの高架式の木道で、木道の両脇に電気柵を併設し、ネズミ返し

ヒグマの問題に限らず、世界遺産知床にはクリアしなくてはならないさまざまな問題が山積みです。知床の自然を将来に残すためには、国立公園管理者のみならず、道路管理者、国立公園利用者、地元住民、観光関係者など、知床に関わるすべての人がそれぞれの立場で考え、行動し、発生する問題に、ソフト・ハード両面からバランスよく取り組んでいくことが必要とされています。

葛西 真輔



人で込み合う知床五湖遊歩道。五湖遊歩道周辺部もヒグマの高密度生息地だ



クマを見ようとする車両により発生した渋滞



道路上に設置されたヒグマへの接近、餌やりを禁止する看板



道路を横断するヒグマ。知床ではよくみかける風景

このシリーズでは、野生動物に配慮した公共施設整備のあり方を探ります。

今年、知床五湖では、環境省により設置された、新しい木道の利用が始まりました。この木道は全長約247m、地上高2mの高架式の木道で、木道の両脇に電気柵を併設し、ネズミ返し

ヒグマの問題に限らず、世界遺産知床にはクリアしなくてはならないさまざまな問題が山積みです。知床の自然を将来に残すためには、国立公園管理者のみならず、道路管理者、国立公園利用者、地元住民、観光関係者など、知床に関わるすべての人がそれぞれの立場で考え、行動し、発生する問題に、ソフト・ハード両面からバランスよく取り組んでいくことが必要とされています。

葛西 真輔



国道334号線から望む知床連山



道道上から望む知床連山



今年春に設置された電気柵併設の高架木道 (写真右側、左側は既存の木道)



斜里町側の知床国立公園入り口。ここを通過する利用者のほとんどが公園内に入ったことを認識しない